

ヤゴ どうしよう？

山梨大学教育人間科学部附属幼稚園（山梨県甲府市）[5歳児]

＜活動のきっかけ＞ ザリガニ池を作ろう

ザリガニへの興味から「ザリガニを釣りたい」という思いをもち、附属小の1年生と一緒にザリガニを釣った。その後タライで飼ったザリガニが、共食いをしたり弱って死んでしまったりしたので、子どもたちはザリガニのために池を作り始めた。すると、ザリガニを捕ってきた学校の側溝の深さを測り、同じくらいの深さにすることに気付いたり、池の大きさや深さ、他の生き物との棲み分けに気付いたりする姿が見られた。保育者はこうした姿を受け止め、より池へのイメージが広げられるような援助をした。（池を掘りながら、子どもの言葉をつないでいく。模造紙に池の設計図を描く。みんなで話をする中で、自分なりの考えを出し合えるようにする）また、「コンクリートの池にするか」「今までと同じブルーシートでいいか」「新しいものを使うか」ということが問題になった場面では、互いに他の人の気付きや考えを知ることを意識しながら、子どもの考えを出し合えるようにし、「コンクリートはアクが出る」「昨年ブルーシートではうまくいかなかった」ということから、池専用のシートを張ることになった。子どもたちの様子から、保護者も相談に乗ってくれることが増えてきた。完成の日は、シートを敷き、赤玉土を入れ、バケツで水を入れるまで全部を、クラス全員の子どもたちと保育者で仕上げた。



事例 ザリガニがない→見つけた虫を飼おう！→池が凍る、どうしよう→もうすぐ卒園、どうしよう

(援助・環境) 夏休みの間にザリガニが少なくなっていることに気付き、よしずでふたをしてみたが、ついに1匹もいなくなる。その後、トンボが卵を産みやすいように水草やワラを池に浮かべ、ヤゴの抜け殻もそのままにして、子どもが気付くのを待つ。

	子どもの姿	保育者の援助・環境
9月 新たな生き物	<p>①夏休みの後、大事にしていたザリガニがいなくなっていることに気付き「池の中に何かいる！でもザリガニがいない」「これ見たことがある！ホタルだよ」など、新たな生き物「見たことのない虫」（ヤゴとヤゴの抜け殻）を発見する。</p> <p>②自分たちの池の中にいた見知らぬ生き物に出会った子どもたちは、さっそく図鑑を持ち出し、調べていった。興味をもった子どもたちは、水槽に入れてヤゴを飼い始める。 <触れる・気付く・試す></p>	<p>①子どもの驚きや気付きに共感しつつもヤゴであるということは知らせず、子どもの様子を見守る。</p> <p>②ヤゴを捕りながら発見したこと、図鑑を見て分かったことを子ども同士で共有し、一人の気付きに終わらないような援助をする。（写真や図鑑のコピーの掲示をする。子ども自身の言葉で気付きを話す機会を持つ）</p>
10月 餌	<p>①飼育ケースに入れられたまま、ヤゴへの関心が薄ってきた頃、A児がヤゴの頭がなくなっていることに気付く。餌が少なくて、共食いをしたと知った子どもたちは、「餌の必要性」に気付く。</p> <p>②自分たちで図鑑を調べ「ヤゴってミミズも食べるんだ！」と知る。餌用のミミズや赤虫を探しては池に入れ、食べる様子を観察する。 <触れる・気付く・考える・試す></p>	<p>①図鑑や絵本を探し、子どもたちが、餌調べや餌探しができるような環境を整える。</p> 
12月 ヤゴが凍る！？	<p>①池の水が凍り始める。子どもたちは池が凍るとヤゴも凍ってしまうと心配し、「ヤゴを助け出そう」ということになる。自分の手が凍り付きそうになるのを我慢しながら、毎日ヤゴを捕る。この頃になるとヤゴがドロの中にもぐっているのもわかってきて、一人が泥をすくい、一人が網を持ってヤゴを探し出すという方法を考えつき行うが、池の中のヤゴが取りきれない。「このままだとヤゴが死んでしまう」という言葉が子どもから出る。</p> <p>②ヤゴの専門家の先生を知った子どもたちは、すぐに先生に手紙を書く。そして、自分たちが直接『ヤゴの先生』に質問し、アドバイスをもらう。先生から「寒い時には、寒い所に置いた方がいいね。ヤゴを水槽の中で飼うのは、本当は難しいんだよ。池の中にいて大丈夫なんだよ」という答えを聞いて子どもたちはショックを受ける。 <触れる・気付く・考える></p>	<p>①本当にヤゴは凍ることはないと想いながらも、冬を越えさせる方法に不安があり、インターネットなどで調べたが、飼育方法しか見つからない。</p> <p>②大学に『ヤゴの先生』がいることを伝える。子どもの気持ちに寄り添いながら、子ども自身がヤゴと向き合おうとする姿勢を支えた。</p>

	子どもの姿	保育者の援助・環境
12月 飼いたい	<p>①「ヤゴをどうするか」話し合う。「やっぱり池に逃がすしかない」「でも飼いたい」ヤゴを飼うことは難しいということがわかった上で、「やってみないとわからないでしょ。一匹でも死んじゃったら全部を池に逃がそうよ」とB児が言い、子どもたちの思いが一つになる。（『自分たちでヤゴを守っていきたい』という自分たちなりの願いが生まれている）</p> <p>②「幼稚園で一番寒い部屋はどこ？」と幼稚園中の部屋を温度計を持って測っていく。そして、一番寒い資料室（通称『ネズミばあさんの部屋』）に引っ越す。</p> <p>③「冬休みに共食いをしたら大変だ」「でも冬休みは餌をやりに来られない」と気付き話し合う。 自分たちで餌のやり方の説明書を書いて、先生たちにお願いをすることになる。家で、保護者と一緒にインターネットや図鑑で調べ、字を教わりながら『説明書』を作ってくる子もいる。</p> <p style="text-align: center;"><触れる・気付く・考える・試す></p>	 <p>①話し合いの中では、子どもの言葉をつなぎながら、子どもたちの気持ちの揺れを受け止め、子どもなりの決断ができるように見守る。また、自分たちにとって、高いハードルをあえて越えていくことを意識させていく。（友達と思いを通わせ、一緒に考え何とかしようとする姿が見えてくる）</p> <p>②子どもの願いを実現する具体的な方法として、温度計の数字を理解していない子も、比べることで温度差を感じられるように、温度計を2本用意する。</p> <p>③自分の考えを表現し自分たちなりに問題を解決できるよう援助する。</p>
1月 ヤゴ研究所	<p>①3学期になり、ヤゴのことが気になっている子どもたちが『ヤゴ研究所』を保育室に作り、観察を続ける。途中、暖かくなり始めると急に食欲がわいたのか、ヤゴが共食いを始めたので、研究員の子どもたちは、図鑑で見たように、ヤゴを1匹ずつペットボトルに入れて名前を付け、面倒を見始める。</p> <p>②遊びの合間にも、誰かが水槽をのぞき込んでいる姿がある。 (直接ヤゴにかかわらなくても「クラスのみんなのもの」という意識があるようだ)</p> <p style="text-align: center;"><考える・触れる・試す></p>	<p>①子どもの要求に添い、場作りや必要な材料探しなど援助する。</p>
2月 卒園 ヤゴどうする？	<p>①卒園が近いことが何となくわかってきた。自分たちが卒園した後、ヤゴがどうなっていくのかを心配し始める。4歳児の「ぼくたちに任せて」という言葉がきっかけとなり、幼稚園に残していくということになる。</p> <p>②ヤゴのことを知らない4歳児のために『ヤゴ図鑑』を残していくこうという意見が出る。子どもなりに、4歳児がわかりやすいように考え、工夫しながら書き進め、全員で1冊の図鑑を仕上げることができた。</p> <p style="text-align: center;"><気付く・考える・伝え合う></p> <p>③小学校の1日入学の後、子どもたちは1年生にお礼の紙芝居をしたいと考え作る。紙芝居「ヤゴが旅立つ日」は、隠れるのが上手で、泳ぐのが速い、木登りも上手、「まるで忍者みたい」という子どもの言葉から、忍者学校に通うヤゴたちの話になる。紙芝居を見た1年生に「とっても上手だった」「もう1年生になっても大丈夫だね」と認めてもらう。小学校入学に向けて、何よりの自信になる。 <共に創り出す></p>	<p>①子どもの思いを受け止めながら、子ども自身納得いく方法を探る。</p> <p>②ヤゴとのかかわりから学んできたものが、その子なりに表現できるよう援助する。</p> <p>③一人ひとりの思いをつなぎながら、一つのストーリーを作るよう援助する。</p> 

評価

「科学する」ということを考えながら子どもとかかわったことで、これまでの生活中では何気なく見逃してきたことに気付くことができた。子どもの姿から「気付き」を見取り、共感しながら歩んできたことで、驚くほどに活動が広がった。<子どもが「もの」をどのように捉えているか><子どもの中にどんなふうに位置付けていくのか><子どもの興味や関心は何か>を、丁寧に見直していくことで、今までにはない活動につなげていくことができるのではないか。

ヤゴ図鑑は、子ども一人ひとりのこれまでの学びが表現され、個々の成長を捉えることができるものである。一人ひとりが自分なりの表現でヤゴ図鑑を書き上げたことは、個々の興味に添った援助の成果として評価できるのではないかと考える。

ポイント

「ザリガニを釣れる池や一緒に釣る1年生」「ザリガニの池になる場や必要な教材」「思いや発想を出し合い一緒に活動する仲間」など、子どもを取り巻く環境が基盤となる貴重な環境になっています。

そこで発見したヤゴへの思いや関心が高くなり、熱心なかかわりにつながったことで、ヤゴの生態や特徴を知り、ヤゴにとってよりよい棲みかや世話について考え、飼育したり思いを伝えたりする体験に結びきました。このように、目的をもって意欲的に取り組む子どもたちの発想や思いを実現するための体験により、「科学する心」が育まれていることが期待できます。